

幾つもの提灯に照らされた道を、土や機械油に汚れた人々が行き交う。彼らは二種類いる。

これから夜間の仕事へ向かう人と、昼間の仕事を終えた人。

だが、この場にいる人々の目的は同一だ。
食事。

これから仕事するための活力と夜食。仕事で疲れた体を休め、明日への鋭気を養うため。

人が活動するのに必要なそれを求め、人々はここに集っている。

左舷三番艦・「青梅」。

武蔵住民が住居を多く構え、同時に生産施設も多数存在する艦である。その為、労働者達への小さいが雑貨屋や食料品、料理店が充実している。

その表層。

道なりに並ぶ店に右舷二番艦・「多摩」のような派手さはないものの、隠れた名店が数多く存在するともっぱらの評判。その為、武蔵内部でも通好みとされ、雑誌などでもよく特集が組まれている場所でもある。

その青梅の道を行くのは、帽子を目深に被り、顔は覆面。右手に雑誌をもった青年だ。

点蔵は迷っていた。

……この本によればこの辺りのはずで御座るが。

右手に持っているのは今週号の武蔵情報誌「しゅらん」だ。表紙にはイメージキャラの中年酒乱ヒーローが酒瓶で全裸を殴り倒している。

……これの制作のときも大変で御座ったよなあ、としみじみ思い返す。

ヒーロー役の人が、マジに酒を飲んで酒乱状態になり、ガチでトリーをぶん殴る等のアクシデントが起こったのだ。

その後、暴行事件として聞いてやってきた番屋がトリー見るなり引き返したり、しかし撮影担当のヨハネス・ケプラーがノリノリでそのまま続行した為、殴られすぎてトリーが痙攣したりと非常に騒がしい事になった。結局最初の一撃目が一番マシだということを採用されたのがこの表紙である。

……ああ見えてトリー殿は頑丈で御座るからな。

懐かしい気分になりながらページをめくる。

今週の特集は「青梅B級グルメ名店特集。大人の小料理屋で居酒屋デビュー!!」とある。そのうちの1ページに目をやる。

未亡人の女将がやっている店で、「働き疲れたあな

たを癒す極上の酒と食事。落ち着いた雰囲気で居酒屋を体験しよう!!」とある。

よく考えれば自分は食事をする時などは大体青雷亭で済ませており、しかもいつもの連中と一緒にである。最近ではメアリの料理があるので外食の機会も無くなってしまったが、ゆえに、一人でゆっくり飲むといった経験はない。青雷亭も正確には普通の食堂であり、居酒屋ではない。

……も、もしかして自分居酒屋童貞で御座るか!?

これはよろしくない。例えどんなことでもあっても童貞はよくない。外道共に知られれば一週間はバカにされ続けること間違いはない。

そんな折、メアリが青雷亭での料理教室に行くという。前日に喜美が女子会だのバジヤマパーティーと騒いでいたので、泊まりになるかもと言っていた。

夕食は青雷亭に顔を出せば御裾分けしますよと言ってくれたのだが。

……そんなことをすれば間違いなく殺されるで御座るよ。

なにせ何時もの連中に加え、立花・闇や伊達・成実も参加しているのだ。そんなところに乱入すれば間違い無く命は無い。

となると自分で調達するしかなく、機関部の連中に

いい店はないかと聞いてここを教えられたというわけだ。

「お、第一特務じゃないですか。どうです、いい娘いますよ?」

遊郭の呼び込みを片手で追い返す。

……と、どうか今の店員は一昨年卒業した忍術科の先輩ではなかったで御座らんか?

ということは声をかけてきたのは確信犯であり、店の中にはカメラや録音術式が仕掛けられていたに違いない。

現に武蔵の通信帯には、失敗したと無数に書き込まれている。

……仕事早すぎで御座らんかな。

おとなしく忍者飯で飢えを凌ぐか、BLUE THUNDERの方へいけばよかったかと軽く後悔していると、気が付けば店の前までたどり着いてしまっていた。

「おお、ここで御座るな」

青梅の通りより一つ裏手の路地。やや薄暗い中にその店はあった。木製の引き戸に提灯には店の名前であるう絹という文字。

しかし、そこで点蔵に躊躇いが生まれた。

……い、いかんで御座る。いざ入るとなると緊張す

るで御座る!!

普段こういう店に入ることのない点蔵にとつて暖簾のれんをくぐる一步が難しい。

頭の中には本多正信のようなダンディな大人ばかりがいて自分だけ浮いているという状況が浮かぶ、そうならば非常にづらい。実際は、その程度のことは気にしなくてもいいはずだが、気にしてしまうのは居酒屋童貞だからか。

……この感覚は中等部の時に罰ゲームでエロ草紙を買いに行かされた時と同じで御座るな。

大人の階段とはかくも急勾配であったか。

店の前で棒立ちしているのも不自然と思ひ、前の路地を行ったり来たりする。時折通りかかる生徒にはあたかも下水の調子が悪いのを調べているかのように躊りやり過ごす。

……これ絶対不審者扱いされてるで御座るよな。

● 画…『あんた格好からして不審者でしょ。今まで番屋にどれだけ第一特務が不審なんですーって通報があったと思ってるのよ』

・ 金マル…『ガつちゃん、それ本人がまたモロ出しするから秘密ってこないだ会議前に決まってなかったけ?』

通信枠を手刀で叩き割って立ち上がる。このまま悩

んでいても仕方ない。ろくでもない風評被害が増えてしまう。

いざ心に決めて立ち上がったところで声をかけられた。

「おや、第一特務も夕食ですか?」

立花宗茂だ。

「おや、宗茂殿もお食事で御座るか」

「はい。閨さんが女子会というものに出るので、今晩は自前で調達を」

よく見れば宗茂の腰にも自分の物と同じ雑誌がささっている。それに宗茂もまた機関部で働いていることが多い。ならば、行動が似通ってしまうのも仕方ないことであろう。

……これは絶好のチャンスに御座る。

なにせ同じ年齢とはいえ、宗茂は三征西班牙の第一特務であった男だ。三征西班牙は比較的年齢層の高い幹部が多い。つまり、宗茂はこういう場所にも行ったことのある可能性が高い。宗茂には悪いがダンにするしかない。

「第一特務のこの店がお目当てでしたか。私も機関部の人から聞いて気になりましたので」

ナイスフォロー、と点蔵は思った。もしかすれば空気を読んで誘ってくれたのかもしれないが、相手はい

つもの外道共ではない。後々ほじくり返される心配はない。

「そ、そう御座る。自分もこの店の評判を聞いて気になつていたので御座るよ」

それに一度立花宗茂とは腹を割って話してみたいと思つていた。彼も三征西班牙では第一特務だった男だ。それに妻帯者としても先輩である。聞きたいこと語るべきことは多い。

「で、では入るとするで御座る」

「ええ」

少しばかり緊張しながら扉を開ける。

「テンゾーとムネムネじゃねーか。珍しい組み合わせだな。まあ座れよ」

割烹着を来た全裸がいた。

「——な、なんでトリー殿が居るので御座るか!! しかも割烹着で!!」

「あれだよ、裸エプロンに対抗してみたんだけどよ、これ前から全然露出少ないんでイマイチだと思わね?」

「うーん、せめて女装してからのほうが騙せるのでは御座らんかなー。って違うで御座るよ!!」

「細けーことはいいいじゃねーか、ほれ座れよ」

トリーの奇行はいつものことである。いつものこと

なのでいつものようにツツコミを入れたが、本来の目的とは違うことを思い出した。

「食事が取れるなら構わんで御座るが……」

ちらりと宗茂の方を見やる。

「お気になさらず。それに武蔵総長の料理の腕前は確認済みですから」

爽やかな笑顔で答えられる。

「では、邪魔するで御座るよ」

「へい、らっしやい!!」

カウンターの席に座る。トリーが居たことで先程までの緊張はすでない。

「で、結局何でトリー殿はここに居るので御座るか?」

「ああ、この女将がカーチャンと知り合いでさ。ちよつと店を開けなきゃいけない用事があるからつてな

んで、カーチャンから直々に手伝いに行けつて言われたんだよ。くつそー!! カーチャンからの頼みでなけりゃ俺も青雷亭に行つてたのによ!!」

それはそれでヒドイ事になっていたはずだが、芸人であるからで納得する。

「しかしオマエら、ホントいいところに来てくれたぜ」

酒を注いで置きながらトリーが笑顔でいう。

「どういうことで御座る?」

「あれ、ノリキじゃね。珍しいな、こんな所で」

「マジか！」

「セージョン、自分のキヤラ忘れてん？」

準バハムート級航空艦『武蔵』、右舷二番艦『多摩』艦上、繁華街。ステルス航行による白い天壤の中で、葵・トリーは首をかしげた。

隣に居る、正純の頭を心配した訳ではない。

遠目には、見知った友人の後ろ姿がある。

時刻は一七時十六分。放課後を終えた頃合いだ。

葵・トリーの隣に居る本田・正純は、葵ならば放課後はどんな事をするだろう、と突発的な疑問を思いついて、そんな疑問が出てくる程度に、自分はこの馬鹿を知らないのだ、と気づいた。だからそれは葵・トリーの言葉が示す人物にも当てはまり、それで思わず、マジか、と言う、自分のキヤラらしくない発言をしてしまったのだ。という事を馬鹿に伝えると、

・約全員…『今お前の話はしてねえよ！』

暇な連中から総突っ込みされた。なんだよもう、と不貞腐れる副会長の肩を、トリーは苦笑で叩き、こいよ、と言う手の動きで誘う。

目的は明らかだった。すでに人ごみに紛れて見えなくなっている級友の姿は、しかし、トリーには見えているのだろう。はつきりと。

私にはまだそこまで見えないな、と正純は小さく肩を落とした。物理的な意味ではなく、隣に居る不可能

男は、何時も背中から見守るような、そんな男だった。どだい、幼い頃から友人である彼らの間にあるのは、自分という新参者がたやすく理解できるような繋がり

では無いのだろう。そう思うと削った胸の奥で小さな寂しさが吹き抜けて、ああこの気持は、と正純は思う、そのような繋がり、自分も持ちたいのだろうか。

「ほら、行こうぜ」

自然に伸ばされたトリーの手が、正純の指先を握り、あ、と思うまもなく、引かれる。

人ごみの中を、迷いなく歩く馬鹿の背中が、その時、何時もより楽しげだった。

「ねえ、佐々つてば」

呼び止める声を無視して、浅黒い少年は歩を進める。それを追う小柄の少女は、

「ねえつてば！ もう、どこ行くのよ。せつかく休みが合ったんだからさあ」

・お前田…『まっちゃんまっちゃん、僕らは仕事してるのに彼らは破廉恥だね！』

即座に通神を切つて、不破・光治は前を行く佐々・成政の腰布を握り、歩みの速度を合わせる。足の長さが違うので、ほとんど小走りだ。

「……ンだよ」

「そつちこそ。何、急いでるのよ」

佐々の背中が氣を抜くとすぐに遠ざかつて、不破はそれを見失わないようにするので大変だった。人ごみの中、背を丸め、両手を腰のハードポイントに突っ込み、歩いて行く後ろ姿。

……変わらないなあ、佐々も。

昔は、彼の隣に前田が居た。今はそれぞれ責任を負う立場だから、顔を合わせる事が少なくなつたが、それ以前、まだ何者かと言う可能性を探していた頃は、三人、いや、まつを含めて四人、で居ることが多かった。だが、多分、目の前の背中が、変わつていない。それは自分がふわふわとしていた時、もう彼が、彼自身の可能性を定めていたからに他ならなかつた。

「約束でもあるの？」

と問えば、彼は鬱陶しげに首を鳴らす。それは、肯定の印だ。

雑踏を歩く先には、一件の店舗がある。

騒々しい、と言つても差し支えない店内の音楽が、店先にまで届いている。

これは、と不破が思い当たると同時に、佐々はその店に入った。

此処は、と正純は馬鹿に手を引かれながら、店に入った。

店先に据えてあるのは、透明素材の箱に収まつた景品であり、壁際に据えてあるのは古い表示枠の筐体だ。そういつたものがいくつも据えられている店内に、学生を中心とした住人が屯している。ある者は席に座り筐体と向かい合い、ある者は複数人で固まつて、灰皿を囲み談笑していた。そういう場所を、正純は知識として知っている。

「ゲ、——ゲムセ？」

「独特な略し方だなあ、セージュン！ 三河弁か！」

五月蠅いな、と言う感情は馬鹿への返しだが、店中の騒音に向けてでもあった。無数の筐体に付属した拡声器から指向性を持たずに撒き散らされる大音量と、人々の声が渾然一体となつて、正純の耳を麻痺させる。

……すごい所だ。

正純は、こういう場所に入るのは始めてだった。貧乏学生で金が無いというのものもあるが、

「気後れしてしまおうな」

「最初はそんなもんだよ」

この熱気は、自分が場違いだと知らせるように独特だった。馬鹿は笑いながら遊戯に興じる人々の間を縫って、正純を引つ張っているが、その笑みが、自分とは違う感じ方をしているのだと分かる。慣れているんだな、と正純は居心地の悪さを堪えるように、引かれる手を強く握り返して、離れないようにについていく。

その先。店の奥に、目的の人物は居た。

ノリキだ。

佐々が立ち止まったのは、人の喧騒から外れた場所に据えられた、筐体かまうたいの前だった。

不破にはそれが周囲の筐体と何が違うのか分からなかったが、何人かが集まって作業をしている。そこに佐々が近づいて、

「ウツス。……どうツスか」

「あ、佐々君。うん、通神の設定が難しくてね。でも、時間までには間に合うよ」

振り向いたのは、作業を見ていた一人の男性だった。胸元の名札には、店長、という文字がある。その

人物に佐々は頭を下げて、筐体を見た。

「ねえ、佐々」

「……なんだよ」

「これが約束？」

無言の肯定が佐々からあり、不破は分かったような分かっていないような声を鼻から零した。

……通神遊戯ツクシユウギだよ、これ。

不思議そうな顔をした不破に、店長の名札を下げた男が、椅子を進める。それに頭を下げながら不破は、何があるのか、と聞いた。

「見ての通り」店長は肩をすくめて、「ここはゲーセンだ。佐々君から聞いてない？」

「あ、はい。あの調子なんで」

「そっか」

うん、と店長は頷いて、筐体で作業している男たちと話す佐々に、目を細める。変わらないなあ、という呟きと共に。それは、佐々の昔の姿を知っている事に他ならない。

私の知らない約束だ、と不破は思う。何時も一緒だったのに、自分が気づかない所で何をしているのだらう？ 疑問は少しだけ寂しさを覚えさせて、その感情、自分の知らない佐々、と言うのが想像もつかない事に、不破は今更ながら気づき、愕然がくぜんとした。何でも知って

いるつもりだったが、そうではないのだ。そんな事はしかし、今更驚くような事ではない——不破とて、三人でつるんでいた時から、成長しているのだ。だからこの驚きは、自分の知らない佐々、という事柄に対してのものではない。

良し、と筐体に取り付いていた店員が声をあげて、不破はそちらを見た。

佐々が頷いて、椅子に座る。主電源の入ったことを示す電子音が筐体から鳴り、不破は、その背中与画面を注視する。



席についたノリキの後ろで、馬鹿は笑い顔のままだった。それは何時もの事なので気には居ないが、目の前でスティックとボタンを軽く触り、確かめるように弾くノリキは、どうなのだろう。気にしていないのかな、と正純は嘆息する。

……いいのかな、此処に居て。

自分のことだ。場違いだ、と言う感覚は来た時と同じだけ残っていて、その違和感、自らの居場所ではないと言う嘔吐感、肌の向こうから聞こえてくるようだ。実際はそんな事を気にする他人など居ないのだが、あるはずもない非難を内側から発してしまうのは、

ある種の防衛本能に近い。今までの生活から外れた空気は、怯えさせるのだ。

そうだ、怯えている、と正純は深く息を吸い込んで、吐き出した。怯えたままではいけない。そういうものを感じる繊細さは大事だが、押し潰されては駄目だ、と背筋を伸ばす。交渉と同じだ。場の雰囲気は飲まれれば、自分を通せなくなる。通すべき自分があつて、通すべき相手が居るなら、下を向いている場合ではない。

と肩を怒らせていたら、馬鹿に尻を揉まれたので反射的にフックを叩き込んだ。

「うわああ何すんだ馬鹿！」

「セージュン！ セージュン！ 足踏んでフックは結構キツイ！」

キツイのはお前の芸風だろ、と独りごちてから、ふと正純は自分の右手に目を落とした。馬鹿の腹を捉えた拳は、さっきまで握られていたものだ。

……大丈夫だ、つて事かな。

あちらから手を外し、尻を揉んできた。それは、もう手を握らなくても大丈夫だろう、と思われたのだろうか。現実には自分はさっきよりは場の空気を気にしなくなつたな、と自覚して、

「……ありがと」

ラストシーンは、広い空間にすると決めていた。漫画でいえばページ丸ごとに描かれた空と大地。

アニメならば、舞い上がる小鳥にパンしつ、そのまま空まで振ったカメラを太陽の白が受け止める。そういう拡散するイメージだ。

一方で、凝縮させるという案もあるにはあった。

意識を向ける方向が、外的ではなく内的であればという話だ。ペンを持っていけばペン先に、剣を持っていれば切っ先に焦点を合わせて、描写する。とはいえ、これも実際は先の案と変わらない。集中させた描写の厚みや深みは、結果として一点を突破したのち拡散し、内面精神の広範さを示す形になるからだ。ただこれは、前の本でやってみたところあまり受けがよくなかった。ので今回はしない。

ともかく、広い空間だ。

ここから先は、考えながら決めていく。

外に出てもよかったし、屋内でそういう場を用意してもよかったが、今回は外にした。後者の場合、読者に狙い通りのイメージを送るのにそれなりの文章を費やす必要があるのに対して、前者は空という概念が持つ印象が幾らか手間を省いてくれるからだ。この期に及んでは、何よりもスムーズに読み進められることを優先したかった。ナルゼ辺りは正当化乙とか言いそう

だが、これは何を説いても無駄なので無視安定。

あとは時刻だが、それはここまでの流れから既に決まっていた。そうして整った箱庭に、満を持して登場人物を解き放つ。コンディションは最高ととってもいい。背景は騒ぐものであり、登場人物は動くものであり、そして作者はただそれらの周囲をぐるぐる回り、よりよい視角を見つけてはカメラを回すものとなる。

たまに動きがぎこちなくなる人物の元に歩み寄っては頭を開き、ネジを回すこともある。セリフの最中、ふとした拍子を見計らっては雲を太陽に撫で付けて、暗がりを演出することもある。そうして物語を一行一行積み重ね、心情を染み込ませて固めつつ、高く高く、結末に向けて練り上げていく。

ラストシーンともなると、総決算的なセリフが増え、ノリ先行な言動を振りまいていたキャラクターも思考を軋ませ、頭を開かれる頻度が上がる。ならばそんならしくないことを、柄にもなく言う理由はなんなのか。その人物の来歴を思いながら、そこは自分で、言葉を作る。考え得る最上のオチを目がけて、話を進める。

ただ、忘れてはいけないこともある。
オチるのは、あくまでこの話であって、

……あ、雑念来てるな。

思うと同時、『ボン』と簡素な音がした。

どうやら、最後の朝が来たらしい。

などと、そんなことを思いながらも手は動かす。

……んー、集中切れたかな。やっぱりなあ。

ポン、ポンと、散発的に耳を打つのはアラームだ。

それを響かせながら振動する表示棒を、爪弾きひとつで黙らせる。以前はアラーム音を自分で吹き込んだ

『時が来た……。全ての始まり、そして終わりが』にしていたのだが、毒見済みエロゲー目当てに来襲した外道衆にたまたま聴かれ、三分後には武威アリアダスト教導院のチャイム音がデータを引っこ抜かれた同音声に差し替えられる騒ぎになってからは、遺憾ながら今のものに変えている。声は作業への集中に同期する術式込みで吹き込んでいたので、こういう風に意識を呼び覚まされることもなく気に入っていたのだが、

……思い出しイラだよ。やだなあ不健康で。

視線を巡らせれば、好みの明度、手元の明かりに勝らない程度の薄暗さに設定された照明の下、絶えず僅かに鳴動している壁がある。

奥多摩の地下。四方いづれの壁にも窓はないので朝日もなく、鳥の声も無論ない。

いわゆる朝チュンを最後に体験したのはいつだったかと、ネシンバラは思った。更に記憶を探ろうとして、いやいやと頭を振る。行動の伴わない思考に割く余裕はないと、指先が表示棒の上で打鍵する。叩かれた分だけ、机上に浮かべた表示棒の中で文字が湧く。それを眺め、口の中で唱え、数行前の文から通して読んでみたりもし、

「……」

また叩いた分だけ、文字が今度は消える。今までよりも目減りした文章を眺めてはまた打ち直し、そしてまた打ち消す。やがて打つにも消すにも動きが鈍り、しまいには前後でおよそ違いが見えなくなつた頃、

「……うん、まあ」

ある一点で動きを止めたカーソルを眺めて、鼻息。前言を添削しようと思う。

行動の伴わない思考と同じく、思考の伴わない行動もまた認めてはならない。特に、自分のようなことをしたがる、している人間は、と。

頭上には目下の作業用に開いていたものとは別に、通神用の表示棒が起動している。それに向かって、「ナルゼ君。ごめん、この辺で抜けさせてもらおう」

『あっそう』

声が返る。反応は即座のもので、だからこそ薄い。

言葉足らずと感じたのか、表示枠サイレンス枠の向こう、おそらくは自分と同じく学生寮の一角で自室に籠り、ラフから下絵を起こしているはずのマルガ・ナルゼは省力的な調子で『そつちはどう?』と添えた。

うん、と前置く。

「ひとまず。うん、ひとまずだ。これで完成としてもいいけど、外で気分リセットしながら練ってみるよ。締めまでまだ数時間あるし」

『フラグね……まあ外でも入稿は可能だし、こつちも出来たらソッコで投げるから後は任せるわよ』

紙に起こす分は未だに活版印刷とかやつてるのに、通神ツウシンの普及に相乗りしてデータの扱いに関してだけはこういう近道しちゃえるんだから、私ら反則よね。

早口で語られるそれを、ネシンバラは妙だと感じる。ナルゼは決して寡黙カモクではない。内心は常に饒舌じょうぜつで、それを表に出す相手や場を選ぶタイプだと、浅くも長い付き合いからネシンバラは認識している。

そしてまかり間違っても、自分はその相手ではない。嫌な予感、と文句が飛ぶ覚悟でこちらも口を急ぐ。

「Jud;、なら実況通神キョウツウシンの方はつけたままにしとくからデータはそつちに頼むよ。じゃ、一旦切るから」
一旦といっても、あとはデータを待つだけのつもりでいた。次に話すときは休み明けの教導院だろうと、

そんな考えのもと言い捨てようとして、

『待った』

「ん?」

振ってきた声に、表示枠を切る手が止まる。

『こつちも続けるわよ』

会話を続けると、そう言ってくる。ネシンバラは、正直な疑問をそのままに告げてみる。

「……なんでまた?」

『このまま一人になったら、私寝るわよ。ええ間違いない。そうなったらアンタ落とすわよ? 私まとめて投げる系だから、確認用のラフ除いたら、まだ一枚もそつちに行つてないものね?』

「……そんなに限界近いのかい? ほら、アレやりなよ。ピンチとか修羅場モードとか、そんな」
『気づかなかった? 三日前からずつとよ、ふふ』

……パワーアップ状態でも苦戦するっていうのは、それ自体は燃えるシチュエーションなんだけどなあ。言葉に意味なく笑いが混じるのは狂ってる証拠なので

従おうと、ネシンバラは経験則から決めていた。
「わかった。わかったけど、こちらも移動しながらになるから、話したかったら基本そつちが振つてよ」

『当然。アンタこつちが神線引ける——!』
つて高まつてる最中に天気の話とか仕掛けてきたら、ソッコ

で二色刷りで表紙にするわよ?」

「やめる」

ともあれ、了解は取ったつもりでネシンバラは席を立ち、ふと遠く、壁の先を見る。それは武蔵の進路を基準に考えれば後方であり、方角で言えば西だ。通神に乗らない程度に伏せた眩きは、

「……あつちは大丈夫かなあ」

思いを馳せるといふ行為を、久々にする。

懐かしい相手と再会をした先日。

そして向き合い、話をした彼の地に。

英国を発つてから、それほど日は経っていない。

『心の声がやかましいわよ、扉絵追加!』

「よく削った鉛筆でも耳に突っ込んでろ!」



奥多摩表層に上がったネシンバラの目には、日の出に浮かび上がる武蔵野と、その左右に横たわる一番艦、二番艦の全景がある。ステルス航行中ではあるが、周辺の大気の調整は外に合わせてある。今は温度が低く、相対湿度がやや高い、いわゆる朝モードだ。

「……うん。今日の反射光はいい感じに情緒あるね」

ふと呟いて、俄かに焦る。

果たして、バックグラウンドで実行中のナルゼとの表示枠は、今もなお沈黙している。

……まあ、順調に没頭してくれてるかな。

撮影機能の表示枠を起動、指先で左右に引き伸ばし、頭上に放る。肩口に呼び出したミチザネにそれを示し、「ミチザネ、あそこから上下にフレーム振ってみて。うん、振り幅はそのくらいいいから」

走狗が動かすフレームに連動して、新たに手元に置いた表示枠の風景も縦横に動く。適当な位置を見つけると、微調整をしながらシャッターを切っていく。

自身で絵を描くことはまずないが、たまに挿絵を他人に依頼する際、共有すべきイメージの雛形になるような画像があればやり取りが円滑になる。ネシンバラの場合、それに加えて効果線やオノマトペを添えてもらうことを要望したりもするが、これが甚だ不評なのは未だに理解に苦しむ。

「今回もだよなあ。自分だってコマの背景で無闇に百合やら薔薇やら散華させてるくせに狭量だよな」

踏み込んだことも言ってみるが、反応はない。

よもや本当に寝てないかと疑いもあるが、ナルゼの創作への矜持を信頼の担保とすることで踏み止まる。

……そういえば、ナイト君は仕事かな。起こしてくられたりとか、居ても期待しちや駄目だろうなあ。